

# 織りと装いの文化とその集団的知的所有権を守る戦い

——グアテマラ中西部高地・マヤ先住民女性の事例から——

本 谷 裕 子

- 1 はじめに
- 2 問題の沿革
- 3 マヤ先住民女性による社会運動
  - 3-1 織りと装いの文化をめぐる現状
  - 3-2 Movimiento Nacional de Tejedoras (女性の織り手たちの全国運動)
  - 3-3 マヤ先住民による社会運動の沿革
- 4 創造品の集団的知的所有権保護に向けた取り組み
  - 4-1 織りと装いの文化の盗用と剽窃
  - 4-2 法改正案
- 5 運動の主旨
  - 5-1 声明文
  - 5-2 運動の主旨
- 6 むずびにかえて

## 1 はじめに

慶應義塾大学21世紀COE-CCCプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成——多文化世界における市民意識の動態」(代表：慶應義塾大学法学部・小林良彰教授)により、二〇〇六年秋、中米のグアテマラ共和国で政治意識とアイデンティティに関するアンケート調査がおこなわれた。調査地の一つが一九九四年より民俗調査を続けてきたマヤ先住民の村ナワラ(Nawala)であったため、その調査結果をもとに、筆者はマヤ先住民の「政治意識」や「政治行動」に関する分析ならびに考察をおこなった(本谷二〇〇八)。その論文において、筆者は調査結果を分析するうえで二つの限界を指摘した。第一の限界とは、アンケート実施数の少なさである。しかしながら、その実施数とは、ある集団の心理的な傾向を知るうえで推計学的データとしては充足する数量であったため(岩原二〇〇三)、質問項目間の関連から人びとの政治に対する意識の流れや政治行動における傾向を導きだした。第二の限界とは、このアンケート調査が「マヤ先住民」ではなく、「グアテマラ市民」を対象としており、すべての質問項目が先住民の人びとの日常言語ではなく、グアテマラの国家公用語にあたるスペイン語で作成され、現地の調査会社に委託された点である。すなわち、その調査とは素性の不確かな外部調査員が調査地へ赴き、アンケート回答者を無作為に選びおこなわれたものであり、調査者とインフォーマント(調査協力者)とのあいだに信頼関係が培われたうえで実施されたものではないという限界である。例えば、「マヤ先住民」の政治意識に特化した調査であれば、実施にあたり、彼らの言語における「政治」を意味する言葉がスペイン語で政治を意味する「political」とはどのように違うのかをはじめ、民族性の違いにもとづく政治概念の違いが考慮されたい。しかしながら、本調査の場合、調査対象が「グアテマラ市民」であったため、この国独自の民族的多様性が調査項目の翻訳や調査の実施にあまり反映されなかったと思われる。

だが、こうした限界を踏まえつつも、調査の質問項目が政治的な内容に集中している点で、本調査は、当時のマヤ先住民の政治的・社会的な状況を知るうえで有意義あるものであったといえる。なぜならば、グアテマラのマヤ先住民村落では、三六年にわたる内戦が終焉してから一〇年を経た二〇〇六年当初においても、政治的な事柄について話すあるいは自身の政治観を主張することに対して極めて慎重な態度を示す人が多く見られ、人びとの政治に関する主義主張を知ることが極めて困難だったためである。そこで、筆者はナワラの事例から、マヤ先住民の政治に対する姿勢、ならびに政治参加の方法や行動についての分析をおこない、彼らの政治参加とその行動に見られる傾向についての考察をおこなった。

グアテマラは一九六〇年から三六年間にわたり政府軍と反政府ゲリラ軍のあいだで武力紛争が続いた国である。一九九六年に取り交わされた和平協定を経て、内戦は終結したと言われる。しかしながら、先の調査結果から明らなるみになったのは、和平協定締結後一〇年の時を置いてもおお、政治に関する自分自身の考えを公言すること、その信条にもとづいて政治に参加したり、政治に関わる行動をおこしたりすることに対して、マヤ先住民の人びとが極めて慎重であること、ならびに同じ村に暮らす身近な人びとに対して深い不信感が根づいているという傾向であった。

しかしながら、月日の流れとともに、マヤ先住民をめぐる社会的、政治的状況は、以前に比べてはるかに改善されてきたように思われる。その兆候を示す事例として、当論文ではこのアンケート調査の実施から十年後の二〇一六年より、マヤ先住民の政治参加やその行動のありかたが明らかに変わってきたことを示す新たな社会運動に着目したい。その運動とは、これまで政治的、社会的な事柄にほとんど関わりを持つことのなかった（あるいは何らかの事由より、関わりを持つことのできなかった）マヤ先住民女性の織り手たちによるものである。この社会運動の主導者にあたる女性たちは、同じ村の出身者同士だけでなく、自分の生まれ育った村以外の女性たちとも、

マヤ先住民女性としての連帯を実現し、その紐帯をさらに広げていこうとしている。

そこで、当論文は、二〇〇六年のアンケート調査結果を踏まえ、近年、創造品（織物ならびにその布から作られる衣<sup>1)</sup>）の集団的知的所有権保護を目的とした、マヤ先住民女性の社会運動をとりあげる。この運動はマヤ先住民女性が主体となり全国規模で展開される、初の社会運動である。現地調査で得られた実証的なデータをもとに、女性たちのあいだでどのように組織化がはかられたかを分析し、この運動を通じて、マヤ先住民女性が今後何を實現していこうとしているかを明らかにしていく。具体的には、まず、彼女たちがどのようにして、出身村や日常言語の違いを乗り越え、マヤ先住民女性としての組織化を図ってきたのか、あるいは今後どのようなかたちで組織化を図っていこうとしているのかを述べる。次に、マヤ先住民女性の織り手たちがどのような問題意識からこの社会運動を立ち上げたか、運動を通じて今後何を實現し、それはどのような段階を経て實現されていくかについて分析をおこなう。最後に、運動の主旨を述べた声明文をとりあげ、主導者たちが、この運動に参加する同志である（あるいは今後同志となるかもしれない）マヤ先住民の女性たちに対して、どのような言葉を述べ、その語りを通じて、何を伝えようとしているのかを考察する。

## 2 問題の沿革

グアテマラはラテンアメリカ諸国の中で、南米のボリビアやペルーとともに先住民人口の多い国である。この国の人口における先住民の割合は約六割にのぼると言われ、マヤ語を起源とする土着の言葉を母語とする「マヤ先住民」がその大多数を占める<sup>2)</sup>。彼らは国土の約四分の一を占める標高一五〇〇メートル以上の中西部高地で暮らし、その先住民性は、国家公用語のスペイン語とは響きの異なる独自の言葉や、私たちとは明らかに異なる様

相をたたえる衣ころもを介して、強く印象づけられる。とりわけ女性たちは、多彩な色糸を使ってさまざまな紋様がありしられた布を織り、その織物を自分の衣に仕立てて装う。

しかしながら、織布から仕立てられた衣を着装し続ける女性とは対照的に、男性の場合、織物を使った伝統的な服装を好むのは一部の老年世代に限られている。今はシャツにズボン姿の西欧風のいでたちをした男性たちも、かつては手織りの布から作られた衣を着ていた。インフォーマントたちの話によると、男性のあいだで服装の変化がおこったのは一九六〇年代であり、その流れが勢いを増したのは七〇年代後半頃とのことである。「なぜ伝統的な衣を着るのをやめたか／やめざるを得なかったか」という、先住民性と装いのはざまに生じた文化的・社会的軋轢について語る彼らの言葉からは、グアテマラ高地の先住民社会が近代国家グアテマラとせめぎあう中で、彼らが伝統衣装から洋装へ自らの服装を変えたこと、その経緯には、個々人の社会経済的な立場や状況が反映されるところにも、この国において一九六〇年より三六年間にわたり続いた内戦が影を色濃く落としていること、さらには、その内戦がとりわけ激しかった七〇年代中頃から八〇年代初頭にかけて、政治的な理由や幹線道路の敷設や学校教育の普及がもたらす生活習慣の近代化に伴い、服装を変える人の数が次第に増えていったことなどがたどられる。そのため、現在、中西部高地のマヤ先住民村落において、完全なかたちで伝統的な衣を着こなす男性たちに出会う機会は、以前にくらべてはるかに減っている。

だがその一方で、女性たちはというと、先にも述べたとおり、今もなお、手織りの布から作られる伝統的な衣に身を包む人びとが極めて多い。ところが、ここ数年の調査を通じて、彼女たちの「民族衣装」が、わずかここ一〇年ほどのあいだに劇的な変化を遂げていることが明るみになった。民族衣装の「ファストファッション」化である。昔ながらの伝統衣装に「見える」その服装に、安価で質の悪い素材を使い、工場で大量生産された新たな衣が散見されるようになった。民族衣装の「ファストファッション」化は、年を追うごとに加速し、今や中西

部高地全域を席捲する勢いにある。

テクノロジの進化、物品の世界規模での移動、さらには物流、情報の拡散と共有の速度が増したことで、地域や風土に根差した極めてローカルな文化が、思いがけない場所で思いもよらないかたちで、経済のグローバル化がもたらすさまざまな影響を被らざるを得ない状況に置かれている。そうした世相は、グアテマラのマヤ先住民女性の織りと装いの文化にも反映され、そこには現在、経済のグローバル化による二つの負の影響が見受けられる。一つが、先に述べた民族衣装の「ファストファッション」化である。それは、スペインの征服者たちがアメリカ大陸へやって来る以前（一六世紀以前）からこの地でおこなわれてきた手織りの伝統が、機械化された大量生産の機織りへと移行したことを意味する。もう一つの負の影響とは、国内外のアパレル企業による、マヤ先住民女性たちの創造品を無断使用した商品開発とその販売、ならびにデザインの剽窃である。

そこで、グアテマラでは、織りと装いの文化に対する侵害行為と、それに伴う文化的・経済的危機を危惧するマヤ先住民女性の織り手たちが結集し、経済のグローバル化がもたらす負の連鎖を断ち切り、改善するための社会運動が二〇一六年に立ち上げられた。マヤ先住民の暮らす中西部高地から発信されたこの社会運動は、その規模を少しずつ全国へと拡大している。そこで、以下、伝統的な手織りの文化をみずからの手で守るために立ち上がったマヤ先住民女性の社会運動について詳述する。この運動を通じて、彼女たちは自分たちの手織り文化が「何世紀にもわたり、この地に生まれた先住民女性の手から手へ継承されてきた文化遺産」であることを認識し、自分たちこそが「(機織りの) 技術保持者であり正当な継承者」であり、その存続を阻むいかなる権力にも屈せず抵抗していくと宣言する。さらには、織りと装いの文化の継承とその保護をめぐる解決策として、創造品の集団的所有権の保護に関する法改正を実現しようとしている。この法改正案がグアテマラ共和国議会でも承認されることで、ラテンアメリカのみならず世界各国の先住民コミュニティに対し、法の後ろ盾を得て、自文化を自

分たちの手で守ることが可能となるような先鞭を着けることが強く期待されている。

### 3 マヤ先住民女性による社会運動

#### 3-1 織りと装いの文化をめぐる現状

グアテマラの中西部高地に点在するマヤ先住民の村々では、日々の暮らしの随所に機織りのいとなみがたどられる。例えば、村の中心地に毎週決まった曜日に開催される定期市には、機織りの道具や織地を構成する材質の異なる種々の糸、紋様織り用の色系に始まり、さまざまな材料が売られている。村を歩くと、機織りにいそしむ女性たちの姿が目に見える。

機織りの作業は、布の大きさに見合った織機を作製することから始まる。数本の木の棒に布のタテ軸を成す糸を渡しかけ、経糸を互い違いに上げ下げし、緯糸を差し込みながら布地を織り進めていくための大切な操作部分である綜統そうとうを整え、布の天と地にあたる両端部分（上下の織り端）を少しだけ織り進めると、原始的な形状の織機こつたばね（後帯機）が姿を現す。この織機の起源は一六世紀以前の先スペイン期にさかのぼる。

グアテマラで目にされる美しい民族衣装は先スペイン期起源の製法で織られた布から作られている。さまざまな織物が衣やテーブルクロス、タオル、ナプキン等々となり、日々の暮らしを支えている。これまで、そうした布はひとたび使い古されると、赤ちゃんのおむつとして再利用されるか、あるいは布地から糸を抜き取り、新しい布を織るための材料にしてきた。ところが、内戦が終息に至る九〇年代中頃から全国規模の道路整備によって観光地化が進み、先住民の村々に西欧的な生活様式が浸透していくのに伴い、古い衣や布は観光客用のみやげものの材料として再利用されるようになった。国内の主要な観光地では、マヤ先住民女性の織物から作られた商品

(手提げカバン、女性用の化粧ポーチ、靴など) が売られている。

グアテマラのマヤ先住民は、この地が宗主国スペインの支配下にあった植民地時代から今日までさまざまな差別にさらされてきた。それが最も激化した時代が、暴力を意味するスペイン語 (Violencia ビオレンシア) で称される内戦の三六年間である。内戦当時は、マヤという先住民性を誰の目にも明らかに示してきた「民族衣装」が、彼らをいわれのない暴力にさらす危険性をはらむ、極めて特殊な社会状況下にあった。そのため、多くの男性が伝統的な衣を脱ぎ、シャツにズボン姿の洋装へと服装を変えた。一方、出身村から出ることのなかった女性たちは、激しい暴力が横行する不安定な時代、機織りに向き合い、心の平静を保ち続けていたという。

彼らの織りと装いの文化を取り巻く状況は内戦の終結とともに一転する。海外から観光客が押し寄せ、先住民女性の美しい民族衣装が、マスメディア、インターネット、さらにはソーシャルネットワークサーブिस (以下、SNS と称する) を通じて紹介され、マヤ先住民の織りと装いの文化が思いがけない「他者」たちによって賞賛されるようになった。グアテマラ社会において、侮蔑の対象となることはあっても、これまでほとんど関心の払われてこなかった先住民の衣の伝統文化を好意的に捉える新たな「他者」の到来とともに、マヤ先住民女性は、自分たちの織りと装いの文化が、異なる価値観を持つ社会でも賞賛される文化資本であることに気がついたのである。しかしながら、そうした「好意的」な他者たちの中には、彼女たちの想像も及ばないような卑劣なやり方で、文化の越権行為を公然とおこなう人びともいる。それは、グアテマラのマヤ先住民女性の織物やそのデザインを無断で盗用した製品を作り、それらを自社商品として販売する国内外のアップレル企業や商社である。商品の中には、現地の人びとには理解しがたいほどの高値で販売されているものもある。

### 3-2 Movimiento Nacional de Tejedoras (女性の織り手たちの全国運動)

創造品の集团的知的所有権保護を希求する社会運動を牽引する女性たちの集まりには、Movimiento Nacional de Tejedoras (女性の織り手たちの全国運動、以下MNTと称する) というスペイン語での名称とともに、この国の先住民言語の一つであるカクチケル語でもう一つの名前がつけられている。“Ruchajixik ni gana'ojbät”と、その名称には、この語が意味する「私たちの知識を大切に扱ってください」という、この運動に関わる女性たちの切実な思いがこめられている。

この社会運動は、MNTの主要メンバーの一人、中央高地の先住民村落サンティアゴ・サカテペケス(Santiago Sacatepéquez) 在住のフロレンティナ・コン(Florentina Con)氏が、二〇一六年五月、グアテマラ憲法裁判所に、織り手たちの創造品の権利を守る法規範が不十分であることに対する訴状を提出したことから、その口火が切られた。翌年二月二三日には、先のコン氏も所属するサカテペケス女性の自立団体(La Asociación Femenina para el Desarrollo de Sacatepéquez、以下AFEDESと称する)が国内他地域の二五の先住民女性団体とともに、創造品の集团的知的所有権保護を求め、刑法ならびに著作権、著作権関連法、民芸品の保護と発展に関する知的所有権法に関する法改正の申し立てをおこなった。AFEDES代表のアンヘリーナ・アスプアック(Angelina Aspuc)氏と先住民出身の弁護士ファン・カストロ(Juan Castro)氏らを中心におこなわれた「法イニシアティブ5247」という申し立ては、グアテマラ共和国議会の先住民委員会に預けられ、同年四月一九日に同委員会の承認を得た。その後、大統領府差別委員会、立法機関や行政機関、文化スポーツ省、検察庁といった関係各所を交えた数回の審議を経て、同年八月二四日、グアテマラ共和国議会内の立法委員会において、マヤ先住民女性の創造品の集团的知的所有権保護を目指す特別法制定のための第一回審議がおこなわれた。現在はその審議の最中にある。

### 3-3 マヤ先住民による社会運動の沿革

これまでグアテマラ高地の先住民が主体となりおこなわれた社会運動としては、国内を分断した三六年間の内戦が政府軍と反政府ゲリラ軍との和平合意を経て一九九六年に終結したのち、米国の言語学者、先住民の知識人や言語学者らが先導しておこなったマヤ運動 (Movimiento Maya) が記憶に新しい。一九九〇年代の社会運動では、多民族・多言語・多文化国家の実現という目標のもと、マヤ言語学アカデミーや文部省、国内外の NPO 団体などが協働し、先住民言語や先住民文化の尊重と保存を目的とした社会・文化活動が展開された (Fischer 1996)。その結果、文化や教育関係の省庁ならびに国政の場に先住民出身の人びとが進出する機会が格段に増え、国内の公的機関に先住民文化を理解する土壌が整った。九〇年代のマヤ運動がもたらした社会構造の変化は、今回の法改正がさまざまな公的機関に好意的に受け入れられる状況を生み出している。

今回の社会運動の中で、マヤ先住民女性が集団的知的所有権を主張するその手作り衣装とは、見るものの視覚に先住民性をダイレクトに訴えかける、いわば先住民文化の最も強烈な文化表象である。だが、布の織り手である女性たちは、言語という先住民文化に焦点を当てた九〇年代の社会運動に「主体的には」関わらなかった (Hendrickson 1996)。それは、活動の大半が先住民言語の維持と復権を目指していただけでなく、その活動内容を知る機会にほとんど恵まれなかったためである。

それに反し、九〇年代の運動の際は蚊帳の外に置かれていた数多のマヤ女性が今回の社会運動に立ち上がったのは、携帯電話やコンピュータという新しい通信機器とインターネットという新たなコミュニケーション手段、さらにはフェイスブックやツイッターといった SNS による影響が指摘される。コミュニケーション手段の抜本的变化により、MNT の活動やその経過など、創造品の集団的知的所有権保護を目指すさまざまな活動の情報の拡散と共有が瞬時におこなわれている。グアテマラ高地の先住民の村々で携帯電話の使用が日常化した現在、女

性たちはSNSでの情報発信と拡散、その共有を通じて、機織りとその創造品という先祖伝来のいとなみが、その主体である自分たちとは無関係な国内外の企業、ならびに観光庁をはじめとする国内の公的機関によって無断で使用され、見知らぬうちに見知らぬ場所で商業化されている実態を知ることになった。MNTが展開する（あるいは今後展開していくとする）活動はSNSを通じて配信されることで、新しいテクノロジーと無縁な老年世代には、彼女らの娘世代あるいは孫世代たちからその情報が伝えられている。

こうした活動の一方で、MNTの会員たちは機織りをおこなう先住民の村々へ足を運び、今回の運動の背景とその目標について話し合う場を設けている。これまで、出身村の異なる女性が一堂に集う全体集会、世界女性デーには大規模なデモ行進が首都グアテマラ市でおこなわれてきた。また、コミュニティレベルでの活動としては、機織りの道具を無料で提供し、MNTのメンバーたちが教師となって、先祖伝来の機織りを同じ村の女性たちや次世代の子供たちへと教授する、無償の織物学校が開校されている。MNTが先導する社会・文化活動は人づてにだけでなくSNSでも情報が共有される。そのおかげで、年代の異なるさまざまな世代の、さまざまな先住民村出身の女性が一堂に会し、この運動に参加できる環境がおのずと形成されるようになっていく。

#### 4 創造品の集团的知的所有権保護に向けた取り組み

##### 4-1 織りと装いの文化の盗用と剽窃

マヤ先住民女性の創造品の集团的知的所有権とその保護に関する問題点として、MNTが指摘するのは、主に以下の三点である。第一に、織物や衣のデザインの盗用する国内外の企業、第二に、織物や衣を商品（カバンや靴など）へと作り変えて、自社ブランドの製品として販売する国内外の企業、第三に、先住民村落にとつての特

別な衣装(たとえば、カトリックの信徒集団「コフラディア (cofrades)」の衣装など)の無断使用である。

(1) デザインの盗用

海外企業によるデザイン盗用の事例として、米国のアパレル企業「BCBG」がサン・ファン・コツアル村のウイピル (Wupil) のデザインを剽窃したブラウスを販売 (二〇〇米ドル) した例がある。また、グアテマラ国内には、複数の先住民村の女性用の上衣ウイピルのデザインを無断使用し、ポリエステル製の布にプリントした大量生産品の安価なブラウス、ならびに同じくウイピルのデザインを盗用し、アジア製のコンピューター制御の織機を使って大量生産した安価なウイピルを販売する企業がある。機織りのいとなみが支えてきた経済活動とその規範を侵害する行為として、最も問題視されているのが、伝統衣装のデザインを盗用し大量生産されたブラウスやウイピルというファストファッション商品である。品質が悪く安価な商品が、近年グアテマラ高地のありとあらゆる先住民村で売られている。その生産・販売をおこなうのは先住民出身の商人たちであるが、彼らの越権行為を罰するための法律が不備であることから、デザインの盗用が野放しになっている。

(2) 織物を使った商品生産と販売

MNT は先住民女性の衣や織物から靴や靴などを作り無許可で販売する企業としてイタリアの「SCALLO」、国内では「Maria's Bag」の名をあげる。いずれも後帯機の織物から製品を作りながらも、製作地や製作者については一切触れず、それらを自社製品として販売している。この二社ほどの規模ではないが数多くの小規模企業が、使い古しの布や古着から靴や鞆を作り、販売している事例が指摘される。こうした企業には織物の製作地を言及するものもあるが、利益を現地に還元するものは極めて少ない。そのうえ、その多くが先住民の古着を再使

用する自社はエコロジカルな社会貢献をおこなっていると強調する。だが、先住民の村々では後帯機の織布は裁断せずに使うと考えられているがゆえに、商品開発と称して布を裁断し商品を作り販売することは、織りと装いの文化の冒瀆だと見なされることもある。

### (3) 伝統的衣装の無断使用

二〇一一年のミスユニバース・グアテマラ代表のアンヘリーナ・バリージャス (Angelina Barrillas) 氏は、同年開催のミスユニバース世界大会にて、グアテマラ中央高地の先住民村チカステナング (Chichicastenago) の男性用の特別な伝統衣装を女性用に作り変えたものを着装した。コンテストの場で彼女が着たその衣装はグアテマラ服飾デザイナーであるジョバンニ・グスマン (Giovanni Guzman) 氏による作品であると紹介された。しかしながら、この出来事は「先住民文化への冒瀆行為」として、グアテマラ国内で大きな論議を呼んだ。なぜなら、特定の先住民村の、しかもその村の一部の役職者男性のみが着る特別な衣装をその村の役職者ではない人物が着たこと、さらには男性用の衣服を女性が着装したという二重の禁忌を、バリージャス氏が世界中の目が注がれている公の場でおこなったためである。

## 4-2 法改正案

グアテマラの現行憲法や主要な法律には、先住民の文化を保護することが国家の義務であると明記されている。だが、実際のところ、それらはほとんど機能していない。その点を苦慮し、マヤ先住民女性の織り手たちは以下の法改正案を示す。

・著作権ならびに著作権関連法 法令三三一九八の改正

「コミュニティとは無関係の人物が商業目的でコミュニティの創造物である織物をコミュニティの承諾なしに再生産することを禁じる。布を織る先住民と先住民コミュニティが知的所有権を有する著者であることを認める」

(スペイン語原文)

Reforma al Decreto 33-98. Ley de Derecho de Autor y Derechos Conexos

“Se prohíbe a personas ajenas a las comunidades reproducir comercialmente estas creaciones textiles, sin consentimiento de estas.”

・ 知的所有権法 法令五七―二〇〇〇の改正

「先住民族が使っている商標や商業名の登録を禁じる」

(スペイン語原文)

Reforma al Decreto 57-2000. Ley de Propiedad Intelectual

“Se prohíbe el registro de marcas y nombres comerciales que utilicen las colectividades indígenas.”

そして、女性の織り手たちがこの法改正案をもとに、今後、制度化していこうとするのは以下の二点である。

① 企業が女性たちのもとへと足を運び、紋様やデザインを使用する許可を求めることの義務化

② 企業は紋様を再生産することに対しての対価、収益の一部を支払うことの義務化

そこで、織物を使った商品の開発やデザインの借用に関し、企業や個人からの問い合わせに対応する窓口として、個々の村に相談役 (Consejo de tejedoras) を設置する。二〇一九年五月現在、すでに七か所のマヤ先住民村落においてこのシステムが機能し始めている。

こうした経緯を踏まえ、今後マヤ先住民女性の織物やそのデザインを使用したいと考えるアパレル企業は以下の手順を踏まなければならない。

(1) 織物ならびにその布から作られる衣、そのデザインの著作権はそれぞれの先住民村に帰属するものと見なす。ゆえに、その村で作られている織物や衣の使用、ならびにそのデザインの借用を求める企業は、相談役のもとを訪ね、事業計画とその具体的な内容を申し出なければならない。その後、相談役の女性を中心に構成されたその村の女性の織り手組織が、その申し出を受けるか否か、受ける場合にはどのような条件を提示するかを話し合う。

(2) 企業側は、織布の使用料ならびにデザインの借用料のほか、その商品の販売によって得られた利益の10%を村側に支払うことが好ましいとされるが、その条件や金額はそれぞれの村の意向によって異なる。企業側から支払われた収益は、女性の生活改善や女性に関わる諸問題（家庭内暴力や就学問題など）解決のために利用される。

二〇一九年五月の時点で、海外のアパレル企業から二件、国内の企業から五件の問い合わせを受けており、MNTの活動内容やその主旨を広めていくために、今後も引き続き、広報活動をおこなっていく必要があると思われる。

## 5 運動の主旨

### 5-1 声明文

創造品の集团的知的所有権保護を目指すMNTは、マヤ先住民の女性たちが集い、織りと装いの文化が直面し

ている現状を知り、今後どう対処すべきかを話し合う集会を、中西部高地の村々で開催している。その際、会場で必ず読み上げられ、参加者に配布される声明文がある。その文面はカクチケル語での名称にあたる Ruchajixik ri qana'ojbäl (私たちの知識を大切にしてください) から始まるが、その後の文言はすべてスペイン語で書かれている。

以下に、その内容をあげる。筆者が作成した日本語訳ののち、スペイン語で作成された原文が続く。

(日本語訳)

“Ruchajixik ri qana'ojbäl” (私たちの知識を大切にしてください)

「先祖伝来の知識と織物の集団的知的所有権保護に向けた全国運動」

私たちは、企業やある人びとが、私たちの織物や私たちの衣にこめられた幾年にもおよぶマヤの織物の叡智を、略奪し商業化することを危惧する女性たちです。ゆえに、私たちは全国の女性の織り手たちの集団を作りました。私たちのコミュニティや私たちの村々に帰属する知識を守るための集団的な道すじを築くという目的を持ち、私たちはまさに対話しようとしています。その知識とは個人の所有物ではありません。

ご存知のとおり、企業とグアテマラ国家は何年も前からマヤの人びとの叡智やマヤの人びとのイメージによって、その中でもとりわけ女性のイメージによって、たくさん利益を得てきました。私たちの叡智を売って得られた収入は、私たちのコミュニティや村には決して還元されません。そのかわりに、私たちの織物や布の周りで現在起こっている搾取に加え、私たちが搾取するすが、日々さらに生み出されていきます。そうした搾取の実態をこれから端的に述べていきます。

(1) 織物は何世紀にもわたって、共同体の互酬性の論理によって創造され、交換されてきました。その織物とはそもそも自分が使う目的で作られた衣でした。トウモロコシやフリホーレス豆など、私たちにとって特別な食べ物に

起きているのと同様、織物を作る費用は織物売って得られる利益よりはるかに高いのです。なぜなら、糸などの材料費が国内市場で高騰しているからです。利益が半分になると、女性の織り手たちは織物での利益が全く得られません。それどころか、労働にかかった時間や労力を念頭に置かず、献金箱であるかのように、私たちは布の製作に投じた費用の一部を自分で埋め合わせているのです。

(2) 私たちの織物で利益を得た企業や人びとは、その織物がどのように作られているかを一切考慮しません。企業の論理で大切なのは、安価な織物を見つけることです。そして、企業は最大の利益を求め、五倍の価格で私たちの織物を買ります。そうした価格の織物は、アウロラ空港（首都グアテマラ市にある国際空港）やグアテマラの観光地の店で見られます。そこで私たちの織物を購入するのはたいていの場合外国人です。あるいは、Matis Bag という企業がしているのと同様に、私たちの織物が、観光客用のカバンや靴、洋服など別のものに作りかえられて、売られています。

(3) 私たちの織物とはコミュニティの倫理を表現するものの一つだと、私たちは理解しています。したがって、それぞれの村やそれぞれのコミュニティに独自のデザインがあります。そこには思想や歴史や社会関係がかたちづくられています。したがって、誰一人として布の著作権を持たないのです、なぜならば、それは集団的な創造品だからです。ところが、企業や特定のデザイナーたちは集団的な知識とは誰の叡智でもないものだと考え、私たちの集団的な知識の特許をそれぞれに取り始めました。そのたびに、告発がますます増えていきます。それは、男性や女性のデザイナーが織物を「渡しに」、村やコミュニティへとやってきて、女性の織り手たちとその織物にある要素の何かを変えなさいと言ってくる、といった告発です。そうすることで、デザイナーたちがその織物の作り手（創造者）、著作者、所有者と見なされ、その布あるいは類似の布を作れば、作った織り手を告発するぞと脅すのです。このようなやりかたで、こうした「デザイナーたち」は布の一枚一枚にこめられた幾年にも及ぶ私たちの叡智を利用し、剽窃し、盗用しています。これは、明らかに一人の織り手に対してのみならず、一つの村全体あるいは一つのコミュニティ全体に対して、彼らがおこなう略奪行為であることは明らかです。

(4) 集団的な叡智に対する個人的な剽窃は度が過ぎていきます。そのうえ、「グローバル的な商売」あるいは「公正な

商売」での売り買いは、粉ひきの徴収者の論理を私たちの手仕事にも押しつけてきます。流行色、規格化、正確な寸法を女性の織り手たちに要求する店があります。要求に叶わない場合、織り手たちにお金を支払わないのです。彼女たちは自分で糸を買い、知識を導入し、時間をかけて織物を作ったにもかかわらず、です。こうして、女性の織り手たちはますます貧しくなってしまうのです。

(5) 国内外の企業はウイピルのデザインを剽窃し、それを商品化しています。そうした商品が、地方の市場に氾濫しています。この行為はマヤの織物の芸術性を死に至らしめるに等しいのです。

以上の項目について、私たちはあなたがた全員と話し合いたいと思っています。そのために、女性の織り手たちによる集会のような、私たちが相互にむすびつく場へと、みなさんを招待いたします。

1 私たちのコミュニティや村を守るために、地域の仕組み、国内の仕組み、社会的な仕組みや法的な仕組みを協働し創りあげるのであります。私たちはグローバルな商業主義の論理に反対します。グローバルなメカニズムの論理の中では、知識は個人的なものにしかありません。マヤの村々は、共同生活という歴史的なすべによって生き長らえています。

2 個人の所有権の保護ではなく、集団的な所有権の保護がグアテマラの法律に含まれるように、交渉をおこない、根回しをしていきましょう。

3 織物と衣に具現化されてきた集団的な知識を守るため、女性の織り手たちの集まりは、先住民たる威信をもち、互いに助け合うことができるよう、それぞれの地域にある多様性を尊重しながら、メカニズムを創りあげていきましょう。

4 私たち全員のあいだで、私たちの織物をもつ地域的な市場を強化し、糸の商業化の独占を粉砕するための道すじを作っていくましよう。

5 マヤの織物を手に入れる諸企業が、コミュニティと女性の織り手たちに対し、私たちのデザインを使うための許可を求めること、ならびにそのデザインの著作権を持つコミュニティの女性の織り手たちに対して、利益の一部を

戻すことを要求します。

6 グアテマラという国が土地を奪い取るとき、逮捕命令を言い渡すとき、私たちの画像、織物、衣、私たちの精神性を民俗化し利用するときにおこなわれる偽善的なやりかたを糾弾しましょう。

(スヘイン語原文)

Ruchajixik ri gana'ojbäl

Movimiento comunitario por la Protección de la Propiedad Colectiva de los tejidos y los conocimientos Ancestrales

Somos varias mujeres preocupadas por el despojo y la mecanización que empresas y personas individuales están haciendo de los saberes milenarios mayas tejidos en nuestros textiles y nuestra indumentaria. Por ello un grupo de tejedoras de todo el país nos hemos organizado y nos hemos dispuesto a dialogar entre nosotras mismas con el objetivo de construir caminos colectivos para proteger estos conocimientos que pertenecen a nuestras comunidades y a nuestros pueblos y que no son propiedad de ninguna persona en particular.

Como es sabido, las empresas y el Estado de Guatemala, desde hace muchos años, han lucrado con los saberes y la imagen de las personas mayas, especialmente de las mujeres. Los ingresos que se obtienen por la venta de nuestros saberes, ni siquiera regresan a nuestras comunidades y pueblos: en vez de ello, cada día se inventan más formas de expropiarnos, tales como los que ocurren actualmente alrededor de los tejidos y textiles, los cuales anunciamos brevemente a continuación:

1. Los tejidos se han creado e intercambiado por siglos desde la lógica de la reciprocidad comunitaria, por ser prendas realidades para nuestro propio uso. Al igual que ocurre con alimentos especiales como el maíz y frijol, su costo de realización es más alto que lo que se genera para su venta, porque los insumos para su realización

como el hilo tienes elevados costos en el mercado nacional. Por lo mismo cuando media el lucro, las tejedoras no tenemos ninguna ganancia por los tejidos, al contrario, funcionan como una alcancía, recuperamos una parte de la invertido sin tener en cuenta el tiempo y el pago por la mano de obra.

2. Las empresas y las personas particulares que han lucrado con los tejidos no tienen en cuenta de la lógica de cómo se produce, lo que le importa a la lógica empresaria es encontrar tejidos baratos y buscarles la máxima ganancia bien sea vendiendo las piezas con costos quintuplicados como puede verse en las tiendas del Aeropuerto la Aurora, en las zonas turísticas del país, donde generalmente los compradores son extranjeros, o cuando los convierten en objetos como bolsas, zapatos, vestidos occidentales, etc., tal como lo hace la empresa Marias bag.

3. Nuestros textiles los comprendemos como una de las expresiones de las lógicas comunales, por eso, cada pueblo o comunidad tienen sus diseños en donde se plasma el pensamiento, historia y relaciones sociales. Ninguna persona se atribuye la autoría de una pieza, porque ha sido creación colectiva. En contraposición, las empresas y diseñadores individuales piensan que los conocimientos colectivos son saberes de nadie y por lo tanto han empezado a patentar de forma individual los conocimientos colectivos, cada vez hay más denuncias de como “diseñadoras” o “diseñadores” llegan a los pueblos y a las comunidades a “entregar” tejidos, donde piden a las tejedoras modificar algún elemento de la pieza, y con ello se atribuyen los creadores, autores o propietarios del tejido, amenazando a la tejedora con demandarías si realizan otra pieza igual o similar. De esta manera, estos “diseñadores” están expropiando, apropiándose o robando los saberes milenarios contenidos en cada una de las prendas. Esta es claramente una forma de despojo que no se le está haciendo solamente a la tejedora, sino a un pueblo o comunidad entera.

4. El plagio individual a los saberes colectivos ha llegado al extremo de que, aun las ventas de “comercio global” o “comercio justo”, están aplicando lógicas maquilleras a un trabajo manual. Hay tiendas que exigen a las tejedoras medidas estandarizadas y exactas y colores de “moda”, y de las tejedoras y por lo tanto no les pagan, habiendo ellas hecho toda la inversión en hilos, tiempo y conocimientos, empobreciéndolas de esta manera.

5. Empresas extranjeras y nacionales, se han apropiado e industrializado los diseños de los güipiles, inundando el

mercado local, esto contribuye directamente a la muerte del arte del tejido maya.

Los puntos anteriores los queremos poner a discusión con todas ustedes y con ello también invitamos a que nos articulemos como una asamblea de mujeres tejedoras:

1. Comunalmente crear mecanismos locales, nacionales, políticos y legales para proteger nuestros comunidades y pueblos. Estamos en desacuerdo con las lógicas del mercantilismo global, en que los conocimientos solo pueden ser individuales. Los pueblos mayas, siguen vivos debido a nuestras históricas estrategias de vida comunal.
2. Negociar y cabildear para incluir en la legislación guatemalteca, la defensa de la propiedad colectiva y no solo la individual.
3. Establecer mecanismos, respetando la pluralidad de cada territorio para que las asambleas de tejedoras puedan apoyarse con las autoridades indígenas para proteger los conocimientos colectivos plasmados en los textiles e indumentaria.
4. Constituir entre todas el fortalecimiento del mercado local de nuestros tejidos y crear rutas para romper el monopolio de la comercialización de los hilos.
5. Exigir que las empresas que lucran con los textiles mayas pidan permiso a las comunidades y tejedoras para hacer uso de nuestros diseños y devuelvan parte de las ganancias a las tejedoras de las comunidades autoras.
6. Condenar el uso hipócrita que el Estado guatemalteco hace cuando despoja territorios, dicta órdenes de captura, folclórica y utiliza nuestra imagen, tejidos, indumentaria y nuestra espiritualidad.

Si no hay protección a las mujeres que tejemos, usamos y comercializamos los textiles, corremos el riesgo de que las empresas y el Estado nos conviertan en delincuentes, nos puedan incluso perseguir y encarcelar.

## 5-2 運動の主旨

声明文にはMNIがどのような主旨のもとに組織され、今後何を実現しているのかと述べているのかが述べられて

いる。この文書は MNT の主導者にあたる三名の女性を中心に、二〇一六年に作成されたものである。二〇一九年三月、作成者の一人ミリアン・アスプアック (Milian Aspuck) 氏に、この声明文がどのような意図のもとで作成されたのかを尋ねた。声明文作成にあたり、主宰者たちが最も考慮したのは以下の四点であるとされる。

第一に、文書全体をスペイン語で作成した点である。MNT はカクチケル語話者の多い地域を中心に発足されたことから、声明文の第一文は *Ruchajixik ri qanaj'ibal* (私たちの知識を大切にしてください) というカクチケル語での別称から始まるが、この部分は集会が開かれるマヤ先住民のコミュニティや村で話されている先住民言語で、カクチケル語名での別称が示す内容と同じ意味の言葉に置き換えられる。二〇一九年現在、グアテマラの中西部高地には、マヤ語を起源としながらも言語学的な分類によると二二種にも及ぶ異なる先住民言語を母語とする人びとが暮らしている。そこでこの声明文は特定の先住民言語ではなく (MNT を構成する中心的存在である女性団体 AFEDDES が活動する地域はカクチケル語話者が多いことから、はじめはカクチケル語で文言を作成することも考えたという)、活動領域を全国規模で拡大していくことを前提とし、あえてこの国の国家公用語であるスペイン語で作成されたという。MNT は地方のマヤ先住民村落の中でも、とりわけ織物生産が盛んな場所、すなわち織りをおこなう女性が多い村で地域集会を開いてきた。しかしながら、SNS を通じて MNT の活動を知り、織りという女性の手仕事に焦点を当てた MNT の主旨に賛同する人びとが徐々に現れたことから、現在は女性の機織りが廃れてしまった村々からも集会開催の依頼が来ているという。集会の場には、現在も機織りをおこなう女性たち、ならびに機織りはおこなわないものの機織りに関心を寄せる女性たちが一堂に会する。ここではまず MNT の主宰者が声明文をスペイン語で読み上げ、次にスペイン語と現地の先住民言語に精通する MNT のメンバーが、その文言を開催地で話されている先住民言語へと訳し変え、会場へやってきた女性たちへと語りかける。第二に、女性たちが暮らしの中で感じているような身近な事例をまじえながら、誰が聞いてもわかりやすい言

葉で、マヤ先住民女性の織りと装いの文化が現在直面している危機的状況を説明している点である。スペイン語で作成された声明文はそれぞれの地域で現地の先住民言語で訳し直されることを念頭に作成され、平易な表現やわかりやすい比喩表現が意図的に使われている。例えば、文中に登場するトウモロコシやフリホーレス豆とは、マヤ先住民の主食にあたる大切な食料であり、近年は異常気象により安定した収穫が得られないことが彼らの日々の暮らしに大きな打撃を与えている。そこで文言中のトウモロコシやフリホーレス豆とは、織物の販売によって収入を得ようとする女性の織り手たちのあいだにも似たような状況が起きていることを、参加者たちが明確にイメージできるように、あとから付け加えた表現なのだという。献金箱や粉ひきの徴収人なども、こうした効果を考慮し文面に加えられた独自の表現である。

第三に、現代の経済システムはマヤ先住民社会のそれとは異なる価値観で動いていることを、参加者に認識してもらうことを意図している点である。織りと装いの文化を共有するにあたり、織物の作り手である女性たちが今日まで自明のことと考えてきた行為とその論理は、現代の経済システムのそれとは異なるために、その主旨が全く理解されていない。ゆえに、声明文には、経済的な側面においてマヤ先住民女性の織り手たちがさまざまな理不尽にさらされている現状が盛り込まれている。事実、文中の「グローバルな商売」や「公正な商売」といった表現は、マヤ先住民女性には理解されにくい。そこで、この点に関しては、集会の場にて具体的な事例が紹介される。また、デザインの剽窃については、デザインを盗用して作られた安価なブラウスを見せながら、現在どのようなことが起きているかが説明される。このように集会の場では、参加者が織りと装いの文化を取り巻く現状を理解することのできるさまざまな工夫がほどこされている。

第四に、知識 (conocimientos) や叡智 (saberes) という言葉を繰り返し使うことで、後帯機の機織りと織物、その布から作られる衣装が、先スペイン期から現代へと続く長い年月の中で、女性の手から手へ伝えられてきた

「マヤ」の財産であるという意識を、女性たち一人一人に喚起させようとしている点である。MNTの主導者たちは、マヤ先住民女性の多くが、「自分たちの織物や衣は日々の暮らしを支える生活財である」との認識しか持ちえず、先スペイン期へ遡る織りと装いの文化的な価値に関して、あまりにも無自覚であったことを問題視する。そこで、MNTの活動を通じて、織りと装いの文化的価値について考えるきっかけを提供していこうとしている。さらには、そうした意識を女性たちに覚醒させることこそが、今後、彼女らを織りと装いの文化遺産を守るさまざまな活動や行動へと導く原動力になるとともに、コミュニティや村落の枠組みを越えた「マヤ」先住民女性という規模の大きな連帯を生む基盤になると考えている。

## 6 むすびにかえて

グアテマラのマヤ先住民女性は、先スペイン期に使われていたものと同じ形状の織機を使い、今日までさまざまな織物を作り、それらを装い続けてきた。彼女らは、自分たちの織りと装いの文化をこれまでは先祖伝来の文化遺産だと考えてきたが、創造品の無断盗用やデザインの剽窃など、違法な文化の越権行為が公然とおこなわれる状況や、自分たちの織りと装いの文化が新たな経済搾取の対象となつていくことを知り、創造品の集団的知的所有権保護を目指した法律の制定を筆頭に、自文化を守る活動を次々と展開している。

織りと装いの文化を守るこうした戦いを通じて、彼女たちは「グアテマラ高地で今もなお先スペイン期起源の織機を継承し続ける自分たちとは何者か」についての問いを繰り返しながら、先スペイン期にルーツを持つ自分たちとその織りと装いの文化を今後どのように表象していくべきかを模索し、新たな先住民女性像を描きだそうとしているように思われる。それは、織りの伝統を現代へと踏襲する一方で、SNSをはじめとする現代的

なテクノロジーを駆使し、世界規模の先住民女性の連帯を生み出していることとする、二一世紀の「マヤ」女性像といえるだろう。彼女らの活動の今後の展開を、これからも引き続き追っていききたいと考えている。

- (1) 以後、当論文における創造品とは、女性が後帯機で織った織物とその布から作られる衣を意味する。
- (2) グアテマラにはマヤ先住民の他に、ガリフナとシンカと呼ばれる先住民がいる。

#### 参考文献

- 岩原信九郎 (二〇〇三) 『新訂版 教育と心理のための統計学』、日本文化科学社
- 本谷裕子 (二〇〇八) 「グアテマラ・マヤ系先住民の政治意識と政治参加に関する一考察——ナワラ村の事例をもとに」、『慶應の教養学——慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集』、三六三―三九三頁、慶應義塾大学法学部
- 八杉佳穂 (一九九五) 『現代マヤ 色と織に魅せられた人々』、財団法人千里文化財団
- Fischer, Edward. 1996. "Induced Culture Change for Socio-economic Development: The Pan-Maya Movement in Guatemala." in Edward Fischer and McKenna Brown (ed.), *Maya Cultural Activism in Guatemala* (Austin: The University of Texas Press), 51-78.
- Hendrickson, Carol. 1996. "Women, Weaving, and Education in Maya Revitalization." in Edward Fischer and McKenna Brown (ed.), *Maya Cultural Activism in Guatemala* (Austin: The University of Texas Press), 156-164.